

第三回 『玉水物語』

たまみず

出典は室町時代の御伽草子『玉水物語』。姫君に恋した狐が人間の娘に化けて、ある家の養女となり、そこから姫君の家に出仕して「玉水の前」と呼ばれ寵愛される、という展開。

【現代語訳】

ちょうどその時この花園に狐が一匹いましたが、姫君を見申し上げ、「まあ美しいお姿だろう。せめて時々でもこのような様子を、よそからでも拝見したいものだ」と思って、木陰に立ち隠れて、気持ち静まらずお慕いしたのは驚きあきれたことだ。姫君は帰りなされたので、狐も、こうした状態でいられるものでもないと思って、自分の塚に帰った。狐はしんみりと座禅をして我が身のありようを考えてみると、「私は、前世にどのような罪を犯した報いで、このような獣として生まれたのだろうか。美しい人を見初め申し上げて、かなわない恋路に思い悩み、むなく死んでしまうようなことになったら恨めしいことだ」と心配し、さめざめと涙を流し悩み寝込んでいたときに、身分の高い人に化けてこの姫君にお逢い申し上げたいと思つたが、また一方で思うには、「私が、姫君と契りを結び申しあげたら、きつと姫君の命が危なくなるだろう。両親のお嘆きもそうだが、姫君が世に例のないほど素晴らしいご様子であるのに、だいなしにし申し上げるようなことになったら気の毒で（そんなことはできない。）」と、いろいろ思い悩んで日々を過ごしていたときに、食物も喉を通らないので、狐は衰弱して寝込んで過ごした。もしかしたらもう一度姫君に会えるかと思ひ、例の花園によろよるとさまよい出ると、人に見つけられ、あるときは石つぶてを投げつけられ、あるときには矢を射かけられ、ますます苦しみに胸を焦がしたのがかわいそうだ。

なまじつか露や霜として消えてゆかない命をつらく思ったが、なんとかして姫君のおそば近くに参つて朝夕見申し上げ辛い気持ちを慰めたいと考えをめぐらして、ある民家のところに、子どもが男ばかりたくさんいて女の子がいなくて、たくさんの子どもの中に一人は女の子だったらと朝夕嘆いているのをあてにして、年十四、五歳の顔立ち美しい女に化けて、その家に行き、「私は西の京のあたりに住んでいた者です。縁者のない身となり、あてにできる方もないために、足にまかせてここまでさまよってきたのですが、行けるところも思いつかないのでこちらにおいていただけませんか」と言う。主の女房が見て、「おいたわしいこと。普通の身分ではないお姿で、どうやってここまでさまよい出てきたのだろうか。これからは私を親だと思ってください。男はたくさんいますが、女の子を持っていないので、いつも欲しいと思っていました」と言う。「そのように言ってくださいることは嬉しいです。どこを目指して行けばいいか行けるところもございませぬ」と言うと、並々でなく喜び可愛がつて家に置き申し上げる。どうにかしてふさわしいような男性と結婚

させ申し上げたいと世話をした。しかし、この娘は全く打ち解ける様子もなく、時々は泣きなどしなさるので、主の女房は、「もし恋人でもいらっしやるなら、私に隠さずおっしゃいまし」と慰めたところ、「決してそのようなことはございません。辛い身が嫌に思われて気分がふさいで憂鬱な様子なので、人並みに結婚することなどは思いも寄りません。ただ美しい姫君などのお側にお仕えして、宮仕えをし申し上げたいと思っております」と言うと、「良いところに縁づかせ申し上げたいいつも申し上げているが、そのようにお考えでしたら、なんともお考えに背くつもりはありません。高柳殿の姫君こそが優美でしとやかでいらっしやるので、私の妹が、こちらの御所に使用人としてお仕えしているので、聞いてみて申し上げます。何事も安心して、お思いのことはお話しください。裏切ることはし申し上げません」と言うので、とても嬉しいと思った。

こうして語らううちに、妹が来たので、このことを伝えると、「そのことを申し上げよう」と言つて、戻り姫君の乳母に尋ねると、「それならすぐに参上させよ」とおっしゃる。喜んで身なりを整え参上した。容姿も顔立ちも美しかったので、姫君も喜びなさつて、名前を玉水の前と付けなさる。何につけても優美で上品な風情で、姫君の遊び、おそばを朝夕離れずお仕え申し上げ、御手水を差し上げ、飲食物を差し上げ、乳母子の月冨と同じく姫君のもとに眠り、おそばを立ち去ることなくお仕えした。お庭に犬などやってくるのと、この人は顔色が変わり、身の毛がよだつようになつて、食事もとれず、おかしい様子なので、姫君はかわいそうに思つて、御所中に犬をおかせなさない。「あまりにおかしな怖がりぶりだなあ」「この人の受けるご寵愛の深さがうらやましいことよ」などと、周囲の人には妬む人もいるに違いない。

こうして時が経つうちに、五月半ばの頃、とりわけ月も曇りがなく美しい夜、姫君は、御簾の近くに座ったまま膝で移動なさつて、ぼんやり物思いにふけりなされたときに、ほととぎすがやつて来て飛び去つていったので、

ほととぎすは遠く離れたところで鳴いている

とお詠みになつたので、玉水はすぐさま、

深い思いの類で鳴いているのだろう

すぐに「私の心のうち」とぼそぼそと申し上げたので、「何ごとであろうか、心の中を知りたい。恋であろうか、また誰か人に恨みを抱えている心などであろうか。不思議だ」と言つて、

五月雨の頃は雲のかなたのほととぎす

誰が思いながら寝る風情をわかつているだろうか